

広島俳句倶楽部

令和六年三月作品集

古希過ぎて

大畑 恵

私は、古希を過ぎて、まだ看護師として働いています。働き始めの頃は、まさかこの年齢になるまで働いているとは思いませんでした。子育ての時は、一旦仕事を辞めて三人の子どもと過ごし、子育てを終えて仕事に復帰しました。いつ辞めようかと思っている間に、古希を過ぎていました。働き盛りの時は、現場の仕事より書類などの仕事の方が多く、患者さんと直接触れ合うことが少なかったのですが、今は、年老いた方や色々な病氣の方々のお世話をさせて頂き、人との触れ合いを大切に働いています。何より元気で過ごせることに感謝して。

また、毎日通う道の季節ごとの変化も楽しんでいます。毎日が少しずつ変わっていて、雨の日も晴れの日もそれぞれで、いつの間にか一年が過ぎて行きます。

春一番風に向かつて出勤す

菜の花の咲く土手を行く回り道

春霞ライトをつけて出勤す

春の瀬戸左手に見て帰りけり

病室の玻璃越しに聞く杜鵑

萩の花通ひの道に咲き始む

日向ぼこ昔語りの老婆居て

小春日や若き看護師頼もしく

看護師と玻璃越しに見る小雪かな

桜咲く中を去りゆく友のあり

《作品鑑賞》

松田 裕子

古希を過ぎて、現役で充実した日々を送られている大畑さん、同年代の私にとって羨ましい限りです。忙しい中俳句にも縁を持たれ、豊かな人生を送られているのですね。そのバイタリティーに拍手です。

春一番風に向かつて出勤す

さあ今日も頑張るぞという活気に満ちた一句。春一番がきいてますね。勢いのある句です。

菜の花の咲く土手を行く回り道

回り道してでも菜の花を見たい。待ち望んだ春が来たことに喜びを感じている一句です。回り道が、その喜びの大きさを具体的に伝えています。いい句です。

日向ぼこ昔語りの老婆居て

情景がはっきりと見えます。暖かな日差しの中で老婆の昔を懐かしむやわらかい声ほっこりとする良い句です。老婆は、入院されている方でしょうか。介護されている作者の姿を想像します。

看護師と玻璃越しに見る小雪かな

忙しく動き回っている中、ふと窓を見ると外に小雪が舞っている。玻璃越しに見る小雪がいいですね。忙しい時の一瞬を切り取ってある良い句です。

佐保光俊

早き雪ゆつくりの雪神の山
縦に降り横に降る雪神の山

村上正人

長靴をしつかり履いて雪を踏む
デイケアの送迎に舞ふ春の雪

高尾ひとみ

初雪の袖に落つるやすぐ吹かれ
雪の舞ふひと日や町に灯のともる

あぐみ

夕鴉山に帰るか雪催
畑で話す声大きくて雪の中

亜矢

いつもより鴉よく鳴く雪の朝
雪止みて高きに丸き月のあり

綾乃

吹越の先より来べき吾子を待つ
雪しまく鍊御殿よ灯台よ

井藤希

初雪や曾祖母見舞ふ子らの声
生垣の昨夜の雪を猫くぐる

栄吉

結晶の形保ちて肩の雪
この雪は根雪となるか日の暮るる

大畑恵

玻璃越しに舞ひ落つる雪眺めをり
庭の本に花咲く如く雪積る

暁子

玻璃越しに日当たる雪を見てをりぬ
大川の向うも雪の降つてをり

すみれ

屋敷松枝にも葉にも雪積り
雪の花てんでに舞うて肩に触れ

知佳子

落ちてくるかけらのままに雪積もる
雪溶けぬままの家並に灯り点く

ちどり

雪だるま作りて子ども帰りけり
就活に行く子を雪に見送りぬ

辻純江

名残雪朝食のパン焼けにけり
ふーふーと朝の珈琲雪の果

雲雀

雪となり本から外に目を移す
六花見とれてをれば日の暮るる

ふじ女

夜の雪寄り添へる白き湖

風花や案内されてレンタカー

松田裕子

気がつけば朝日の中の小雪かな

深雪晴前に大きな裏大山

森口良樹

鉄棒に雪の積もれる休校日

イコモスや錦帯橋に雪が降る

大原良子

愛犬の足跡ばかり庭の雪

上島康子

職場まで指悴んで雪の朝

紀英子

雪囲外し明るき庫裏となる

熊谷ゆり子

雪解けの水の流れて百の橋

須美れい

地震続く能登半島に雪積る

高嶋絹代

初雪のプラントーにも薄らと

高梨英子

雪女郎吾をどこかへ連れてつて

土肥律子

雪の降る空を見上ぐる我ひとり

みさ子

故郷の雪の盆地へ電話する

美耶

遠山の初冠雪に朝日差す

山崎桂子

変りなく市電は走り雪の朝

山野ウタ

意識なき母を訪ねて牡丹雪

古墳へと冬田伝ひに行きにけり

猪毘や古墳見定め戻る道

冬枯の後円に立ち人の影

背戸山に寒禽の声聞き分けて

春寒の風は鳴り川合さりぬ

春禽の左右に逃ぐる山の道

つぎつぎに古墳見てゆく春の山

梅園の道の一つは駅へ向き

日に向いて梅林の道帰りけり

居眠りの覚むれば春田広がりぬ

郵便受の被つてゐたり春の雪

木瓜の花夜の明くる毎色深め

実を付ける種物選び買ひにけり

教会の再臨の絵に春日差す

朧月残る朝空群青に

カンバスに描く音のして春の昼

雲雀鳴き目覚むるときの心地よさ

この川に今年も見たり柳鰯

雁木にて靴底濯ぐ春の川

上着着て出掛ける朝の百千鳥

しらじらと朝日の照らす枯野かな

枇杷の花電車を待てば風強く

遠くより草焼く匂ひ冬田道

冬桜吾に向かひて咲きにけり

臘梅のすこし離れてなほ香る

古は蓑かりユックに冬の雨

春近し小雨の空を見上げけり

西へ行く電車の窓に梅探す

梅の花一枝づつに顔を寄せ

菜の花に絵本読む声よくとほる

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

ハウスものの節分草を見てをりぬ

たんぽぽを摘んでここから上り坂

水溫む泉境の橋渡りけり

黄水仙活けて厨の窓に触れ

やから来る桃の花束家苞に

窓開けてしばらく眺め朧月

貝母の花どこから来たか咲きにけり

雨傘のずらりと並び彼岸寺

風光る上げ潮に乗り鴨の群

湯くやうに蝶々出づる菜畑かな

あざみ

一歩づつ雨後の落葉の匂ひまつ

雪の朝鴉遠くへ飛びゆけり

高階の庭に冬木の並びたる

冬の月何度も見上げ歩きたり

棘のある寒木しばし見てをりぬ

寒木の雨滴間を置き落ちにけり

寒月や家の影あるアスファルト

バス停のベンチの側に犬ふぐり

マンションの狭きベランダしやばん玉

浅春の樟に集まる雀かな

亜矢

人々の賑はひ止まず梅の園

娘との壺湯へ散つて梅紅し

菩提寺へ吾子と向かへる春の泥

吾の手を握る患者よあたたかし

草萌を跳ねて仔犬と壮年と

恐れなき吾子の一步や青き踏む

片恋が吾に生まれて百千鳥

故郷の山より眺め大霞

半刻を桜並木の川に居り

広重のごとく傘さす夕立かな

綾乃

春立つや空曖昧に晴れてをり

春まけて溪水の音聞きに來る

半時を妻と辿れる春の川

川原へと積もらぬ雪の降り頻る

阿弥陀經小さく唱和す梅二月

海からの光を受けて梅の花

泉邸の試歩となりたる梅見かな

手を打つて異人の呼べる春の鯉

水口に鯉の寄り合ふ春の池

鳥声の本立を巡る日永かな

井藤希

故郷はふくら顔の雛人形

土筆摘むいつもの道の突き当たり

ポケットに干からびてゐる土筆かな

春の雪成り行き次第の遊山かな

幼子のまだ見えぬ目に春の雪

花馬酔木巖ひとつの城の址

海風や白木蓮は散り始め

短肌着おくるみも干す春の空

クロッカス行進曲の聞こえる

春の暮犬が先行く散歩道

栄吉

玻璃越しに石庭を見て春浅し

母さんとつくしんぼ摘む畔の道

つくしんぼ幼き子らの手の中に

春めいて友と集へる同窓会

春嵐ホルンフェルスに怒濤散る

春嵐猫寺の猫何処へやら

玻璃越しの椿眺むる日曜日

紅椿咲いてゐるねと夫の言ふ

菜の花の休耕田の中に居り

桜桃の花にそよ風吹いてをり

大畑恵

根白草瀬音しづかになるところ
行く人と顔を見合はせ初音聞く
土手の草掻き分け探す路の藁
落椿の上にまた散る椿かな
宵からの雨のしきりに雛祭
瀬戸内の菖の空を鳥帰る
糠雨が玉砂利濡らし春めける
人声のまた聞こえけり春の山
畑打の四方よりする鳥の声
陽炎の立ちて周防の国衙跡

暁子

斧を振り薪割をする少年よ
ストーブに誰彼となく薪を入れ
広島の牡蠣を食ふぞと客の来る
畑の隅一株根付く節分草
金縷梅の下の地面を掃きにけり
雨傘を畳み見上ぐる梅の花
川中の石に留まり雛の舟
芽吹く山年で一番好きな色
沈丁花路地を曲れば匂ひくる
春の雨地を打つ音の心地よく

すみれ

梅林を行き交ふ人はみな笑顔
高きより枝垂れて梅の重ならず
枝垂れるて高き枝より梅の散る
御空よりつぎつぎ降つて春の雪
母が家の春障子開け仏花摘む
名を知らぬままの挿木の根付きたり
抱へ来て捌いて活けし花ミモザ
躑躅の芽色づき初むを見つめをり
うららけし道教はりて一人旅
暮るるまで川を見てをり桜まじ

知佳子

降る雪を窓から母と見てをりぬ

畑の端に親子で探す露の臺

門の傍の白梅を見て出掛けたり

母が家の裏の祠に梅の花

梅の花姉の墓前に活けにけり

母が家に見下ろす土手の野焼かな

猛る野火川向うより見てをりぬ

一番に菱餅飾る母の部屋

菱餅を遠方の子に送りけり

残る鴨二羽が揃ひて水を掻く

ちどり

金網の内は米国春の那覇

パイヤの押し合うて生る旅初日

シーサーの遠き海見る桜かな

足の指開く運動寒戻る

山腹に光る鉄塔春めけり

この鞠は姑の手作り雛飾る

もつとよく見たき揚羽に去られけり

仕舞湯の玻璃戸の隅の朧月

名を知らぬ小鳥の声や葦の角

焼いとるよとお好み焼屋春の風

辻純江

田舎宿次から次と雪女郎

洗濯をさつと済ませて梅探る

次のバス来るまで梅を探りたる

田の神の元気になるか春一番

友の絵の生きる喜び梅日和

受験する子のことと思ひ庭を掃く

春の道頬に受けたる晨の風

菜の花の眺むるもよし食むもよし

母逝きて仕舞ひ忘れし雛人形

君立つ日四月の雪に祝はれて

雲雀

夜半の春奇声静まるログハウス

春昼や父ばかり見る時刻表

低音の男子車窓の初桜

両親が両親とは長閑なり

春泥のバス停大学生ばかり

大試験終わりし高校の制服

春の水一人暮らしのマンションより

しじみ汁産地の違う温かみ

広々と平野見知らぬ春田かな

尾翼より蛇行している春の川

ふじ女

老いたる叔母老いたる吾と梅探る

枝垂梅そこには違ふ風の吹く

春一番若菜マークの子を案ず

雛を愛で生後百日祝ひけり

園児らの紙雛を置く駐在所

鳥居まで囀りの道続きたり

初蝶のやうやく来たか庭の光

蝶々の近くに來ては離れけり

玄関を出づればふいの春の雷

麓から頂までの桜かな

松田裕子

葬送に降りてしづかや牡丹雪

締め直す鍬の楔や別れ霜

梅が香のまた匂ひ立つ雨上り

黒稲荷帰りも買うて一の千

潮風の波止に揚がりて風

青鰻や女将の声のよく通り

沓石に日の届きたり花莖

背に顔に泥の跳ねをり磯遊

借景の白砂青松風光る

母が吹き子が追ふ土手の石鹼玉

森口良樹

末黒野の畦道をゆく使ひの子

竹林を過る初音に目を凝らす

留守をせる家を片付け二月尽

弟に渡して飾り吊し雛

炊き上がる露味噌紙めて苦きかな

野良猫の寝る勝手口沈丁花

車窓過る名もなき山に辛夷咲く

野に遊ぶ男朽ち木を振り回し

古里のせせらぎ跨ぎ春の虹

木々芽吹く雨後の朝や宿の庭

木の芽晴芝駆け回る子犬かな

木の芽晴走り根多き山の道

参道のでこぼこ道や馬酔木咲き

苔生せる雁木を洗ひ春の波

鳥雲に母の遺しし山野草

外つ国の子の集まれる花ミモザ

尾も鰭も動かぬままや春の川

一雨にそこそこあそこ春芽かな

枝先に鼻を近づけ梅の花

三色のチャッカマンあり堂うらら

検査着のつんつるてんや花杏

春の昼検査の台の冷たくて

紅はつぺ頬張つてゐる春の旅

山野ウタ

大原良子

高梨英子

オリオンを吾子と仰げる駐車場

満員のバスに置みて雪の傘

花嫁の打掛紅や春隣

冬うらら結婚式の余韻かな

吾子握る味付海苔の塩むすび

シヤベル持つ妹初の潮干狩

臨月の口にとろける枇杷ゼリー

土肥律子

ご近所に寝められ庭の実万両

さげもんをびっしり吊つて雛の宿

散れるとも吾を癒せり落椿

春ですね夫亡きことをまた忘れ

白雲を金色に染め春日没る

須美れい

明け方の春雷夫は寝てをりぬ

二分咲きの花に見知らぬ人集ひ

来客に束ねて渡す花ミモザ

川縁の柳にいつか春の雨

子のあとを追ひかけてゆく春野かな

撫子

春炬燵仕舞はぬままに旅に出る

夜の道木蓮なほも咲くを見て

白足袋の汚れ易くて春疾風

咲き残る赤き椿を母と見る

桑門わかこ

立ち並ぶ雪吊の前五六人

春隣近江町にて小買物

還暦の娘との旅水温む

菜の花や舟繫がれて筑後川

高嶋朔代

沈丁の香りの強き夕べかな

春寒し器を選ぶ二個三個

馬酔木咲く隣の庭を通り抜け

紀英子

十本の大根洗へる恵川かな

沈丁に足を止めての長話

菜の花や空き家はカフエに変はりたる

熊谷ゆり子

弓なりに木の枝揺らす春一番

引越の荷の中に入れ雛二体

叢雲の切れ間のひかり月と星

民

首垂るる三桎の花鳥の来る

春雨や大樹の先に坂つづき

散歩道いつもの角の花覗く

美耶

苔むして旧家の重み梅咲けり

菜の花の色紙に替へて客を待つ

枝も葉もゆらゆら光り春の昼

やす保

春の朝安芸小富士を眺めたり

来客のありて咲き満つ桜草

上島康子

川土手の足元に出で露の臺

春の昼頭に月の透き通る

みこ子

嫁がせて二人となりぬ雛祭

オルゴール鳴らして雛を納めけり

山崎桂子

令和六年二月度作品集より

暁子 私の選んだ十句

けさ焼きしばかりの畔を帰りけり
春泥に踏み込んで荷を届けたり
寒き夜を獣の声に目覚めたり
春眠や時をり古書の匂ひたり
残雪に木屑落として鴉立つ
手の平にすぐ消ゆる雪受けてをり
立春の風のほどよく吹きにけり
徘徊の兄と見てをり寒茜
ニン月の川ニン月の空映す
春めくや新譜を買って帰る道

佐保光俊
村上正人
あざみ
綾乃
すみれ
知佳子
松田裕子
森口良樹
桑門わかこ
山崎桂子

ちどり 私の選んだ十句

疫を病みて蒲団の中の心地よき
春の月辺り赤らめ昇りけり
春霞出航の銅鑼ひびきけり
初春やバツハ聞きつつ物を書く
春眠や時をり古書の匂ひたり
母の喉ゆつくり動き苺食ぶ
草の芽の出づる道端里に着く
洗ひたるシーツ膨らむ春の風
風花や夫の着物を解きをり
手を引いて梅の盛りを歩きをり

佐保光俊
村上正人
あざみ
亜矢
綾乃
井藤希
すみれ
知佳子
高梨英子
桑門わかこ